

# 住宅地に於ける景観の相貌と変容その2

—都市住宅の型形成の為の一考察—

正会員 高橋鷹志\*  
同 ○渡辺 治\*\*

### ■ 目的

住宅の外部に対するシツラエ（正面性の形成）が基本的に街路を形成していくもので、日本住宅の場合、家・庭・道の構成自体が外部に対する正面性の形成原理であることを前回の大会において指摘した。今回はさらに一般の既存住宅の外周部、特に道路面の空間に着目することにより日本住宅の外部に対するシツラエについての示唆を得、建てづまりにより変形を余儀なくされている現代都市住宅の問題解決のための考察に役立てようとするものである。

### ■ 方法

世田谷区内の15地区のにおいての一般住宅の敷地の外周を調査し、写真により外部（街路）に対してのシツラエ例を採取し分析を行ないその傾向を探った。

### ■ シツラエ①—「ヒキ」の手法

この手法は入口部分に於いて現れてくる。1つは門の部分であり、もう1つは建物の導入部分に於いてである。これらの手法の源流は少し古い住宅を見ることによって知ることができる。

#### ・門の「ヒキ」

日本古来の数寄屋建築に於ける中門や中入りといわれる門の形式又は、武家屋敷の門と結合したヒキを引き継いだものと思われ、これは新築の西洋化した住宅に於いても変形・縮小しながらも使用され続けている。

#### ・入口の「ヒキ」 (図-1,2、写真1,2)

1つの源流は数寄屋に見られる手法で、茶室などの入口部分を切り欠いて庇をかけるような例が認められもう1つの源流は、古来の農家に於いて見出すことの出来る形式で入口部分に庇を架けたり、空間を引き込むなどして外と内との曖昧な空間を持っていた。

(図-3,4、写真3)

以上の手法は最近の狭小し西洋化した住宅に於いては、単に形式的に使用されている例が多く、中には盲腸のように既に役割が果たされていない例もある。

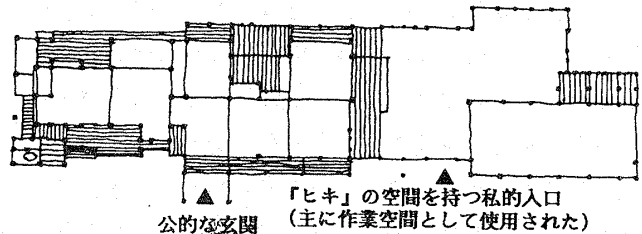


図-1. 2種類を持つ農家の例 (吉村家) 1) 切り欠き

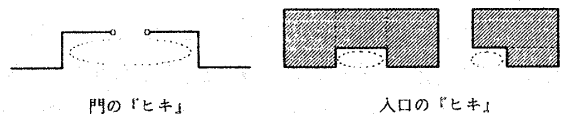
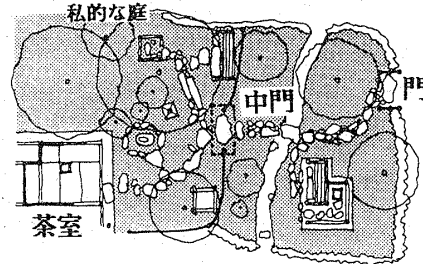
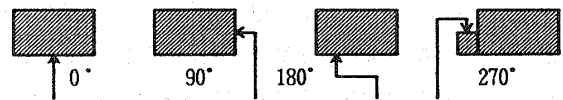


図-2. 「ヒキ」



ここでは明らかに公と私の庭を意図している

図-3. 中門を持つ庭の例 2)



特に狭小敷地、入口前に駐車場を設ける場合に多く見られる  
道路が敷地の東、西にある場合や角を切り欠いた入口に見られる  
最も多く認められ、半間の隙間さえあれば実現可能である  
今回の調査では1例を確認できたのみである

図-4. 住宅導入部に於ける「マゲ」

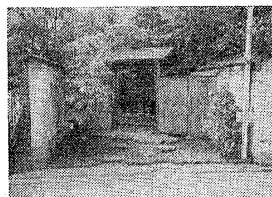


写真1. まだ中門形式が顕著な例

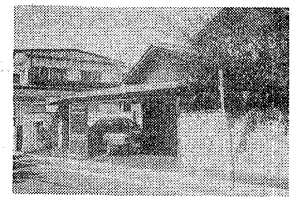


写真2. 「ヒキ」の空間を駐車場としている

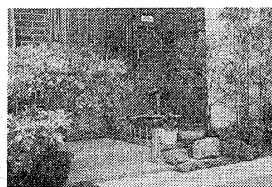


写真3. 玄関の「ヒキ」での展示行為

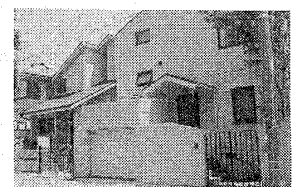


写真4. 「マゲ」が形式的に使用されている

■ シツラエ②-「マゲ」の手法

日本建築、日本芸術におき、非シンメトリー性が発展してきたことは周知の事実である。現代住宅に於いてもそのアプローチ空間で形式化した屈曲が見受けられ、当初不規則な美を楽しんだ行為がその内、不規則性がアプローチ空間において単に来客の方向を変化させるという形式のみが残ったと思われる。(写真4)

以上の傾向は本州の影響をあまり受けていない北海道においてはあまり現れない手法であり、日本古来から受け継がれてきた手法と言っているものであろう。

■ 空間の段階性と展示性

以上に挙げた様な行為は西洋の建築に見受けられる装飾的行為(色、浮き彫り、模様等表面的に飾り付ける行為)とは根本的に異なり、アプローチ空間において「マゲ」等を用いた来客の行為に働きかけるもの、または「ヒキ」といったような空間を創ることにより空間に段階性を与え、外と内という概念を作り出すといった行為により、外部に対してシツラエるのが日本住宅のやり方である。そういった点で西洋における住宅のファサードの連続自体がそのまま街並みを形成するものとは性格を異にしている。

また、通常そういった各空間では庭木、石庭、水、生花等による展示的行為が見られ、内部空間に至っては床の間、玄関の下駄箱の上等、何かを置いて見せるといった空間に働きかける行為が日本住宅には重要な要素であると言えるだろう。

■ 現代住宅におけるシツラエ原理の崩壊

現代住宅は都心付近の建て替え時の敷地の細分化、及び郊外小規模住宅建設により年々敷地の狭小化した住宅が増えている。それに対して、外周の空間を確保

するよりも内部の床面積や駐車スペース等を確保することが優先されるため、(新築敷地S43-198㎡→S53-178㎡, 新築持家延床S43-95㎡→S53-120㎡, 新築分譲住宅延床S43-65㎡→S53-80㎡, 世田谷区~東京都建築統計年報)日本住宅のシツラエる為の空間が極度に縮小し、元来の「ヒキ」、「マゲ」によるシツラエ原理は崩壊しつつあると言っているだろう。

■ 新たな型の模索

以上の様な状況で従来のような住宅形式では住環境(光、プライバシー、床面積等)が十分に得られなくなってきており、最近の住宅の傾向を探ると既に、それらに対応すべく新種が次々と現れて来ているのが認められる。それは大きく分けて、従来のようにフェンスを用いたものと用いないものがある。(表-1)この中でも高床式(特に3階建)は他のものと比べて狭小敷地に適応している(図-5、狭小敷地で床面積を確保することに成功している)かのように見え、実際にも年々激増しているわけであるが、街並み形成上、他の建物(アパート、マンション等)とのギャップ、駐車場ともかねあわせ、典型的都市住宅の型としてこれから定着してゆくべきものかは疑わしい。

■ おわりに

今回は特に敷地狭小化を新しい型形成の根拠として扱っていたわけだが、地価急上昇により、2世代住宅、アパート併用住宅、2戸建て住宅等、住環境のみではなく経済的環境適応型とでも呼ぶべきものが一方で激増している。こういった社会状況が投げ掛ける新たな問題とそれを何らかの方法で切り抜けようとする住民の中に形成される型知識(常識的知識)や型形式を今後、より明確化し住宅問題の解決の糸口としたい。

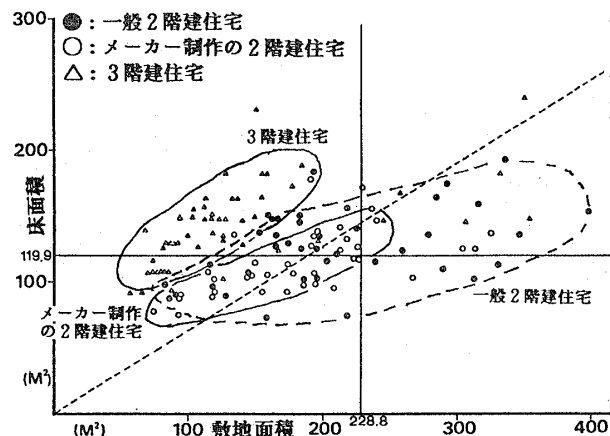


図-5. 3階建住宅の狭小敷地での床面積の獲得<sup>3)</sup>

手法 課題	開い無し					開い有り		
	高床式	緑遮蔽	直立壁	立面	導入部	開利用	上居間	斜線
光環境	○	×	-	-	-	△	○	-
床面積	○	-	-	-	-	-	-	○
プライバシー	○	△	○	-	-	○	○	-
街路への表情	×	△	○	○	○	○	○	×
空間の段階性	△	-	-	-	○	○	○	-

高床式-1階部分を駐車場等にするなどして家全体を上上げる形式  
 緑遮蔽-開いなくなると家の中が見えるので代わりに緑等を植える  
 直立壁-道路側の境界線付近に家の壁を立てるがほとんど窓を設けない(特に北側)  
 立面-西洋風等、デザインに凝りむしる見られることを意識する  
 導入部-入口部分にヒキの空間を設けて入口的表情を与える  
 開利用-開いを建物の一部としてデザインにとりいれ積極的に利用する  
 上居間-いわゆる2階リビング  
 斜線-斜線に対応しながら半ば無理に床面積を確保する  
 凡例・○-解決しうる △-ある程度解決しうる ×-かえって悪化 ---無関係

表-1. 最近の型化しつつある住宅の言語

- 1), 2) SD選書「日本の庭園」田中正大の図よりトレース
- 3) (株)住居環境研究所よりデータ入手

\* 東京大学助教授 \*\* 同院生